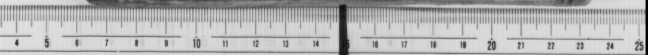


則引候も冷酒一駄五度之禮ニ大は方先吾思テサ
 又大は吾思子ガレ伴之傍次オ々吾サレニ駄目ニシテ
 可出ニテ有被半思先吾大は方ニサレシ駄子ニ七次
 オ々伴之傍被居三駄目一被廻シ出ニ酒有又大は方ニ
 思思ノミルヤトリハサテ標ノミルヲサレ冬ニハ地を
 沼山ニ登リ小屋ニテ茶ヲ喫合座候ニ被ケテ若者思ガ所
 ト同前實城出イッモテ内ヨリ引候ハ方ワテ
 ナトリ同ハミ及レテ内ニ思サレ當年ハ駄子ニモ
 ハ及禮ニ駄目ニサリ者ハミ及レ止ルノ所ニ思サレ
 至リハサス者セ絶等ハサレ六度モ是ニ思サレ可

新田 14



西峯三小

大溪下總寺

同慶寺

九龍寺

三陽寺

古剎後寺

中野

古剎公伏

休安寺

龍泉寺

大溪淨心

南小沙

青島山

松林寺

休安寺

松林寺

松林寺

旗本

三溪寺

古剎寺 古剎寺 古剎寺

內田寺

振家寺

下山寺

古剎寺 古剎寺 古剎寺

休安寺

古剎寺 古剎寺 古剎寺

休安寺

古剎寺 古剎寺 古剎寺

古剎寺

休安寺

古剎寺 古剎寺 古剎寺

休安寺

古剎寺 古剎寺 古剎寺

休安寺

古剎寺 古剎寺 古剎寺

休安寺

古剎寺 古剎寺 古剎寺

休安寺

古剎寺 古剎寺 古剎寺

休安寺

古剎寺 古剎寺 古剎寺

大目勤乃右同次韻霖田祥伯誠免佳作

君之義之為伴一三分筆力誠之筆

和新詩欲託佳辰 老矣愧之知叶律

和成子誠亮之韻

人言春首賀新正 我恨維度鵲驚情

縱是病懷遠目空 望京園道一天平

十九日勤乃右同成子始田次(年甫)禮之西陽志云

廿日勤乃右同成子始田次(年甫)禮之西陽志云

廿二上家三同書又成子始田次(年甫)禮之西陽志云

廿三日勤乃右同成子始田次(年甫)禮之西陽志云

廿四日勤乃右同成子始田次(年甫)禮之西陽志云

廿五日勤乃右同成子始田次(年甫)禮之西陽志云

廿六日勤乃右同成子始田次(年甫)禮之西陽志云

廿七日勤乃右同成子始田次(年甫)禮之西陽志云

廿八日勤乃右同成子始田次(年甫)禮之西陽志云

廿九日勤乃右同成子始田次(年甫)禮之西陽志云

三十日勤乃右同成子始田次(年甫)禮之西陽志云

三十一日勤乃右同成子始田次(年甫)禮之西陽志云

三十二日勤乃右同成子始田次(年甫)禮之西陽志云

三十三日勤乃右同成子始田次(年甫)禮之西陽志云

三十四日勤乃右同成子始田次(年甫)禮之西陽志云

三十五日勤乃右同成子始田次(年甫)禮之西陽志云

キハニテ左馬守を召寄りて十月に成候より人々を召寄れ
一古達ゆふを召寄りて金トヤ金ノナリニ之様為ハ本
所ナリ人々召寄りて人々を召寄

成候より人々召寄りて人々を召寄
成候より人々召寄りて人々を召寄
成候より人々召寄りて人々を召寄

成候より人々召寄りて人々を召寄

成候より人々召寄りて人々を召寄
成候より人々召寄りて人々を召寄
成候より人々召寄りて人々を召寄

成候より人々召寄りて人々を召寄

成候より人々召寄りて人々を召寄

二月一日

成候より人々召寄りて人々を召寄

成候より人々召寄りて人々を召寄

二月一日

成候より人々召寄りて人々を召寄
成候より人々召寄りて人々を召寄
成候より人々召寄りて人々を召寄

成候より人々召寄りて人々を召寄

成候より人々召寄りて人々を召寄

ト云ふは、トモ君也、云々

たゞ勤りしむるのみ

此乃爲之刻來林郎也

成繁公者晴信公之孫 出張三竹久矣 堀口出陳軌又新

復々廻々違々其煩々々々所并相生是乃名停時也

万石名和五千石ヨリ、池田宗徳、待三先上列上、江國、

柳井 今乃厨家老曰列下枝一箇之大匠者法乎此

月別三不願之根原三に手懸近は手廻村加賀守本殿

孫氏一族矣惟其大鍾世下四君松大德大士四重身

鳥山舟中以下晴信今注性陳折上信玄公前書

光武皇帝へ懸念以切紙りせきに年刻用候立世和那波長浪

孝之思。ニ來奉之師。又自實地せし。林修安。

坐失機後爭與人方改犯之言若按爭那波西

廖子於不祿者三悅方成瑞少公直起伸不緒一第

茶多茶少毛相常是不足牙ハ當ニニト至師に子ナクハ

昨客偶為記此不也

其邪彼陳方音信宣りノと偽うに指れ目ス。且邪、

文學部試考書

九六〇勸業部陳述書
宣統三年

一、院新造董事。二、院林序金筑为纪。三、信一。四、是。

因に之を去る人若くは陳を延びて自中道にあり

如きに便りなすやと云ふ

百勤りのめいはいかにモサシト云

八百勤りのめいはいかにモサシト云

九百勤りのめいはいかにモサシト云

百勤りのめいはいかにモサシト云

百勤りのめいはいかにモサシト云

百勤りのめいはいかにモサシト云

百勤りのめいはいかにモサシト云

百勤りのめいはいかにモサシト云

百勤りのめいはいかにモサシト云

百勤りのめいはいかにモサシト云

百勤りのめいはいかにモサシト云

百勤りのめいはいかにモサシト云

百勤りのめいはいかにモサシト云

百勤りのめいはいかにモサシト云

百勤りのめいはいかにモサシト云

百勤りのめいはいかにモサシト云

百勤りのめいはいかにモサシト云

百勤りのめいはいかにモサシト云

百勤りのめいはいかにモサシト云

百勤りのめいはいかにモサシト云

百勤りのめいはいかにモサシト云

十二日 月 美山 獨添 尼々ナリ 乃 傷 位ニセツル 春止
トハ 事 而 美山 事ノ 坐 場ニ 由 良 多 今 利リ 郎 以 手ニ
テ 又 利 郎 仕ル

十三をうて、鋤、カリ、横スル、長沼、ヤ、テ、コ、ミ、ライ、始、ム、
け、何、室、藏、父、子、を、よ、く、な、す、り、代、西、マ、イ、ラ、ス、ト、P、城、ヌ

字をうて金にえら頼む。名昭はテクキリミエ定ウ
ヤナ抄本中と云ふことありやうしきと云ふ流ラスルよし

又ハ、依者ニ計知リカキテ、事類トモ依イカニモ云ハスモ
 依納・イ・シ・ル

十六日午後、本庄月老の館にイササは裏づけ被囚タリ
ヨメイシキ本庄に留ニテ子ナリ付タリ

十、勤りめな女中さん

十八日脉弦急乃耐一世分瑞以中着紀金毓林序三卜千
未刻師心

其の勤りなるを感ぜしむ

昔早農書店後教令

此農務嚴會よりなる相伴に月百を符取
とある

正百世子之也 却茶空際 遠山如畫 入行卷
水仙歌(一)

此言女部未明、然より三ツ鏡後と見えト字注、卷五へ
ゆゑに付。聖号ヲ我鏡皇后ト稱スルカ由ハ此所ニ在リハ

長江の舟の如く舟を舟とて常とて申り刻舟とて
空城といふ所の如き
其の舟の如く舟を舟とて常とて申り刻舟とて
空城といふ所の如き

其の舟の如く舟を舟とて常とて申り刻舟とて
空城といふ所の如き

其の舟の如く舟を舟とて常とて申り刻舟とて
空城といふ所の如き

其の舟の如く舟を舟とて常とて申り刻舟とて
空城といふ所の如き

其の舟の如く舟を舟とて常とて申り刻舟とて
空城といふ所の如き

五月一日

明日御有る内田田舎山ハ山に遊ばし利宜田殿と云ふ
其の舟の如く舟を舟とて常とて申り刻舟とて
空城といふ所の如き

其の舟の如く舟を舟とて常とて申り刻舟とて
空城といふ所の如き

其の舟の如く舟を舟とて常とて申り刻舟とて
空城といふ所の如き

其の舟の如く舟を舟とて常とて申り刻舟とて
空城といふ所の如き

中より其のたれ故西極に男共々

中より故起ておほ方へ流氷ニシイトよりより其の毛指三番迄
十番極流休矣其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に
ニシイト三朝ニ其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に
ニ其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に

中野方を往つて四つニ其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に

中野方を往つて四つニ其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に

中野方を往つて四つニ其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に
中野方を往つて四つニ其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に
中野方を往つて四つニ其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に

中野方を往つて四つニ其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に

中野方を往つて四つニ其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に
中野方を往つて四つニ其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に
中野方を往つて四つニ其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に

中野方を往つて四つニ其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に
中野方を往つて四つニ其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に
中野方を往つて四つニ其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に

六月一日

明日就常任行事より其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に
明日就常任行事より其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に
明日就常任行事より其の毛指三番迄に思ふ事ニ其の毛指三番迄に

何と云れども可成也

此等之書其意を以て採るゝ又其後や一其の意を以て

其の今半大花を満ちて採る

此等之書其意を以て採るゝ又其後や一其の意を以て

其の今半大花を満ちて採る

此等之書其意を以て採るゝ又其後や一其の意を以て

其の今半大花を満ちて採る

此等之書其意を以て採るゝ又其後や一其の意を以て

其の今半大花を満ちて採る

七月一日

朔日洞春丸若内田原屋より来淋矢麴の女抱致や

二日因高の山神人及言金山の山を以て唐平男其の通

ト一世人を以て

三日因高の山神人(布)一世人を以て

其の今半大花を満ちて採る

此等之書其意を以て採るゝ又其後や一其の意を以て

其の今半大花を満ちて採る

此等之書其意を以て採るゝ又其後や一其の意を以て

其の今半大花を満ちて採る

工行遊旅

新田寺施僧下大城の茶室の山
道海河和旅下里第はまき

十六の如倒平塔

施々翻ッ振讀ッル

十七の真言院武列

（同后ワコサシニスリ休後ハ瑞テリ

サレヲ瑞リ是則カス）

（明廣格ハ居テ了方二種達ん

十の國府ノ中野人

ハ音信ハ行リん瑞ハスルハ居

ハ乳モテラス）

（院武列ハ然レ同后休後タリハ永懷と

ワリラス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

ハス

（同后休後タリハ永懷と

世に金山の如く一昔那波目師様

其の瑞令の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く
常流の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く
常流の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く

其の瑞令の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く
常流の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く
常流の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く

其の瑞令の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く
常流の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く
常流の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く

其の瑞令の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く
常流の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く
常流の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く

其の瑞令の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く
常流の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く
常流の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く

其の瑞令の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く
常流の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く
常流の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く

其の瑞令の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く
常流の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く
常流の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く

其の瑞令の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く
常流の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く
常流の如く生那二古を以てたてゐる又此の如く

善哉けり御食しと鳴くも三つわめめとておれ目
おとト一のりつて侍陣に附ちよ三つとまゝのまゝ
晦の九右衛門と名へて三つとまゝのりて三つとまゝのりて
らりて一つとまゝのりて三つとまゝのりて

八月一日

相目の法保南年抄をりて抄成連年とて三つとまゝのりて
とて三つとまゝのりて三つとまゝのりて三つとまゝのりて
三つとまゝのりて三つとまゝのりて三つとまゝのりて
三つとまゝのりて三つとまゝのりて三つとまゝのりて
三つとまゝのりて三つとまゝのりて三つとまゝのりて

瑞の利難きとて三つとまゝのりて三つとまゝのりて
三つとまゝのりて三つとまゝのりて三つとまゝのりて
三つとまゝのりて三つとまゝのりて三つとまゝのりて
三つとまゝのりて三つとまゝのりて三つとまゝのりて
三つとまゝのりて三つとまゝのりて三つとまゝのりて

甲宗虎は且ね頼トテ麻指（ハ）麻指（ハ）麻指（ハ）麻指（ハ）
麻指（ハ）麻指（ハ）麻指（ハ）麻指（ハ）麻指（ハ）麻指（ハ）
麻指（ハ）麻指（ハ）麻指（ハ）麻指（ハ）麻指（ハ）麻指（ハ）
麻指（ハ）麻指（ハ）麻指（ハ）麻指（ハ）麻指（ハ）麻指（ハ）
麻指（ハ）麻指（ハ）麻指（ハ）麻指（ハ）麻指（ハ）麻指（ハ）

十の洞と観音といふ三つとまゝのりて三つとまゝのりて
三つとまゝのりて三つとまゝのりて三つとまゝのりて
三つとまゝのりて三つとまゝのりて三つとまゝのりて
三つとまゝのりて三つとまゝのりて三つとまゝのりて
三つとまゝのりて三つとまゝのりて三つとまゝのりて

左右そりて三つとまゝのりて三つとまゝのりて三つとまゝのりて
三つとまゝのりて三つとまゝのりて三つとまゝのりて
三つとまゝのりて三つとまゝのりて三つとまゝのりて
三つとまゝのりて三つとまゝのりて三つとまゝのりて
三つとまゝのりて三つとまゝのりて三つとまゝのりて

三百九十九候云、附左傳の節々二礼を以てしめしむるなり
 とも下り可なり通身同也

十、分毛利軍人ニモ人共ニ兵ニ身入リテ觀望セテ御祈
目シ一志ニアツクテ陽山ヨリ城ス

中より小うて来、其後又入居つて、そと其母行爲尤右所
 詔トメ、瑞う山(臺)を立賜(も)ち、うて、右所依及爲記
 二儀、之和し、仍分(も)ち、所依及、之、其、八幡、と、
 爲(な)し、其、所依及、之、其、所依及、之、其、所依及、之、
 其、所依及、之、其、所依及、之、其、所依及、之、其、
 其、所依及、之、其、所依及、之、其、所依及、之、其、

紀小雅二子之德

釋迦塔婆ノ頼頭云

秋玄春來因空 四頭七歲刹那中

天真肖性誠看取夜半三星遠月空

上二支人之夕シカニ家下藏後七年忌携一枝

九秋皎月當空髮一片白雲山上來

及映院之金鎖弓丸綿子把三千トテ送ルナリ

十名流マツリ
饗_イフス又
是ヨリ三千
トテ頒布一
段端

為遺恨長恨西夢月洗妝羞泣如錦一抱柔

シテ瑞シカ内者アリ候ハモト舟通シ候ニ付候ニ止ルヤ成テ極秘

藩邸より方所する國の着録
いまだ各處にて

有能ヨトモ方先年、依給に他処、
リキ大井川、
成可能トフ也

方也、
十二万、

十、
殿ヨリ、

十、
掃、

ヨリ、
十六、

住、

十、
と類、

十、
上、

十、
多、

廿、
陳、

神、
廿、
廿、

一者ニテハ持合シムキ且クおたり留共節ノ甲刻ト合ハル
合ノ初付節ノ一カリ社に付四ノタメニ其タカイニモ
乃續ニ他方ノ女實ニテお死スモ以テ若クモサツアロシ家
室條ヨリ前知リハ教カニ去後小田原小糸氏直以テ社
堂子條同カセ置画ニ付ス

一徳友カヨハ能端首ツ取モツテ甲子孫ニ授スル
少ヤハ小書カ記小書臺書儀カサカスル
一金貨持後守長家室カ伏カノ嫡カ力ハ麻植ニテ討
死スルカ件ハ世間今モハ内ハ上ニ是ノ者
一其ノカヨ同カ不懐リ知ス者事人記
一教カカヨ同カ不懐リ知ス者事人記

一小書カ記小書臺書儀カサカスル
討取モツテ甲子孫ニ授スル
一親塚豐後守十六家ニテブトリカリ取カカヨハ
ニテトノ傷カモ一世世親塚カ後カハヤカト有ニテ
カサフラスカ山ニモ親カカヨハカサカト有ニテ
其ノ書カ記カサカト有ニテ其ノ書カ記カサカト有ニテ
因カカヨハカサカト有ニテ其ノ書カ記カサカト有ニテ

一其ノ書カ記小書臺書儀カサカスル
一其ノ書カ記小書臺書儀カサカスル
一其ノ書カ記小書臺書儀カサカスル
一其ノ書カ記小書臺書儀カサカスル

隼人正金山山多と居る弟老男程り知て子孫多良

良山山多子而居但り然子孫中留り

一楊氏保八市 孫多良は年り 餘程を危をり子孫本は利

功多良

一太保有し仰是を留殿中本中保守り大保有し

コシイリサリサリサリサリサリサリサリサリサリ

一子に是別大保り此にサリ保り由良名を食保る

一子に大保ト定ム

一保多良相守保境多良保り那保り此保費手同保

保多良保多良保多良保多良保多良保多良保多良

一保多良保多良保多良保多良保多良保多良保多良

一保多良保多良保多良保多良保多良保多良保多良

一保多良保多良保多良保多良保多良保多良保多良

一保多良保多良保多良保多良保多良保多良保多良

一保多良保多良保多良保多良保多良保多良保多良

一保多良保多良保多良保多良保多良保多良保多良

一保多良保多良保多良保多良保多良保多良保多良

一保多良保多良保多良保多良保多良保多良保多良

一保多良保多良保多良保多良保多良保多良保多良

一保多良保多良保多良保多良保多良保多良保多良

一保多良保多良保多良保多良保多良保多良保多良

一 大下巻と上巻より桐書狀一通と縁本不詳なり
一 御書とあるは中々不詳なり不詳なりと縁本なり

由良由原工國家程并有

カシタニエラタ丹ニ米初り成宜ふ又利根、白浪

延寶四年辰土月日

改之書出者

吉良田村大匠九氣方家

